

博士学位論文審査要旨

氏名	亀井 恵里子
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博甲第 304 号
学位授与の日付	2024 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文の題目	Analysis of Pragmatic Competence of Adolescents Diagnosed With Autism Spectrum Disorder: Topic Management and Repair in Family Interaction With Caregivers
論文審査委員	主査 神奈川大学 教授 細田 由利
	副査 神奈川大学 教授 デビッド・アリン
	副査 神奈川大学 教授 村井 まや子
	副査 関西学院大学 教授 森本 郁代
	副査 獨協大学 特任助教 バッタ・バイクンタ

【論文内容の要旨】

本研究の第一の目的は、社会的相互行為が困難とされる自閉症スペクトラム障害（ASD）と診断された人々の相互行為能力を探究することであった。そのため ASD と診断された日本人とオーストラリア人の青年とそれぞれの養育者の間で行われた自然発生的な会話を分析した。分析では 2 つの異なる文脈から得られたデータによって、ASD と診断された人が相互行為を行う際に特に困難であると示唆されている領域、話題の管理と修復に焦点を当てた。記録された相互行為の分析により、ASD と診断された青年が養育者と相互行為を行う際の特徴や能力を明らかにすることを目指した。

本論文は 7 つの章で構成されている。第 1 章では、本研究を紹介し、主な目的を明らかにした。

第 2 章では、ASD と診断された生徒に対する教育の現状についてまとめた。本論文は、ASD と診断された日本とオーストラリアの青少年とその養育者の相互作用の分析に焦点を当てているため、日本とオーストラリアで見られる教育的背景と問題についてそれぞれ述べた。

第 3 章は 5 節で構成し、本研究で検討した関連文献について概説した。第 1 節では、会話分析の基本的な側面である(a)順番交替の組織、(b)連鎖の組織、(c)優先組織について概説した。次に、本研究の主要な焦点である、トピック管理と修復の組織について、それぞれ第 2 節、第 3 節で概説した。第 4 節では、近年明らかにされてきた ASD と診断された人の特徴を端的に述べ、その後本論文に関連する ASD 研究のレビューを行った。最後の節では、CA を活用した ASD 研究の有効性を議論した。

第 4 章は、本論文で用いた研究の方法論に関するものをまとめた。この章ではまず、本研究で分析するデータの概要、データ収集の方法、研究プロジェクトの参加者について説明した。次に、本章で考慮した倫理的問題についても詳しく論じた。最後に、本研究で利用した方法論の信頼性、妥当性、客観性について述べた。

本研究では、ASD と診断された青年とそれぞれの母親との相互作用の 2 つの側面、(a)話題の管

理、(b)修復の組織に焦点を当てている。これらは第 5 章と第 6 章で詳細に論じている。

第 5 章では、まず話題の開始や話題の転換といった話題管理における ASD と診断された青年の相互行為能力を明らかにした。さらに、ASD と診断された息子との会話を維持するために、養育者がどのような戦略を用いているかを論じた。

第 6 章では、修復の連鎖の 4 つの現象 (a)青年の自己開始自己修復、(b)青年による他者開始修復、(c)母親による他者開始、青年による自己修復、(d)母親による他者開始他者修復を検討した。

最後に第 7 章では、本研究で得た知見を紹介した。さらに知見に関連する含意と影響に言及し、今後の研究の方向性について論じることで本研究を締めくくっている。

本論文のために分析された実証的データは、日本とオーストラリアの家族の自然発生的な会話を約 11 時間に渡って録音録画したものである。研究者はあらかじめ定義された研究課題を探索しようとするのではなく、参加者の相互行為の連鎖をどのように達成されたかを観察するために、会話分析の視点から事例を書き起こし分析した。すなわち、研究者はデータの検証と観察をすることで浮かび上がった上記 2 つの相互行為領域、話題の管理と修復、を分析するに至った。これらの二つの領域は一般に ASD と診断された人が相互行為を行う際に特に困難であるとされている領域である。

話題管理の分析から、ASD と診断された日本人の青年は母親との会話において、定型化された質問を巧みに扱うことで新しい話題を開始していることが明らかになった。その一方で、その青年は ASD と診断された人にとって課題とされる疑問詞を用いた質問への応答に対して困難を示した。しかしながら、そういった質問に対しても定型化された質問を展開することで、母親との会話を維持する能力も示していた。

ASD と診断されたオーストラリア人の青年は分離マーカ―や継続マーカ―を巧みに用いて話題の開始、移行をしていた。また、母親からの依頼を直接的に拒否することを避けるために話題を転換していた。これらの点を考慮すると、日本人とオーストラリア人の青年は、程度に差はあるにせよ、それぞれの相互行為能力を明らかにした。

さらに、日本人とオーストラリア人の母親の行為を分析したところ、ASD と診断された息子との会話を維持するために、いくつかの戦略を用いていることがわかった。例えば、質問形式を繰り返し用いることで、母親たちは息子から返答を引き出していた。また、オーストラリアの母親は、息子からの応答を引き出したり、会話への積極的な関与の機会を増やすために、命令文を用いたり、息子の発話を繰り返したりしていた。このように、自閉症の息子との相互行為において用いられたこれらの戦略は、会話を管理・維持する上で非常に効果的であった。

さらに、本研究では、ASD と診断された日本とオーストラリアの青年が、母親との会話の中で生じた修復にどのように対処しているかを、(a)青年の自己開始自己修復、(b)青年による他者開始修復、(c)母親による他者開始、青年による自己修復、(d)母親による他者開始他者修復の 4 つのタイプの修復を検討した。青年たちによる自己開始自己修復について分析した結果、特別な困難は観察されなかった。

母親の発話に対する青年たちの修復開始については、日本人の青年は、母親の発話を確認するために日常会話でよく見られる修復開始を何ら問題なく行なっていた。しかしながら、別の事例では青年の語用論的障害が明らかになった。格助詞の誤用や他者との文脈共有の困難は語用論的な言語使用や社会的コミュニケーションが難しいとされる ASD と診断された人の特徴と一致していた。一方、オーストラリア人の青年は、疑問詞を的確に使用する、前置詞に疑問詞を加える、母親の発話を繰り返すなど、さまざまなテクニックを用いることで修復の他者開始を成功させていた。この結果から、オーストラリア人の青年は他者との会話で生じた問題を適切に対処する能力を有してい

ることが明らかになった。

次に本論文では、母親によって他者開始され青年たちによって修復が操作された例を分析した。日本人とオーストラリア人の青年は、受け手に合わせた発話をデザインすることが困難であり、その結果、修復連鎖が生じてしまっていた。次にオーストラリア人の青年が母親の修復開始にうまく対処できた事例を検討した。話し相手に合わせて発話をデザインすることが困難であると指摘する先行研究とは異なり、彼は母親のニーズに志向し修復を完了させていた。

本論文で分析した修復のもう一つの現象は、日本人の青年と母親との相互行為における母親の他者開始他者修復である。分析の結果、母親は相互行為の進行性を維持することよりも、教室で教師が生徒の発話を訂正するように息子の不適切な言葉の使い方を修復することを優先していた。

本論文の結果は、ASD と診断された生徒に対する特別支援教育の研究や、ASD と診断された子どもへの介入に関する研究にいくつかの示唆を与えるものである。例えば、教育現場の教師は、ASD と診断された生徒の不適切とも取られがちな発言や行動を、単に問題視するのではなく、さまざまな意味を含むコミュニケーションの技法として認識する必要があることが示唆された。さらに、本研究で分析された母親たちの行為、特に ASD と診断された息子と会話をする際の彼らの戦略（例えば、息子からどのように応答を引き出すのか、どのように会話を維持するのか）は、介入研究にとって貴重な示唆を与えるかもしれない。

【論文審査の結果の要旨】

これまで、特に日本国内では、自閉症スペクトラム障害（ASD）に関する研究は実験的な研究が中心であり、会話分析を用いた研究は最近ようやく見られ始めたところである。亀井氏の研究はその傾向の先端であると考えられる。今日までに、ASD と診断された日本語母語話者と英語母語話者の両方を比較検証した研究は未だみられず、非常に画期的な研究である。ASD と診断された青年達の日常会話の録音録画データを収集した試みは賞賛に値する。特にオーストラリアまで渡って録音録画の許可を取った努力には敬意を払う。分析に関しても、多くの会話分析の専門家にアドバイスを受けた上で精密な分析を行っており、非常に質の高いものである。この研究結果は特別支援教育や ASD と診断された子供を持つ親に対して多くのことを示唆できるもので、社会的に非常に意味のあるものである。

今後の課題としては次の点が考えられる。

- (1) 日本語母語話者のデータに比べて英語母語話者のデータが少ない。今後は英語母語話者のデータをもう少し収集して検証してほしい。
- (2) ASD と診断された日本語母語話者の青年と ASD と診断された英語母語話者の青年では知的障害のレベルに差があるため、簡単には比較できない。今後の研究では知的障害のレベルを合わせたデータで比較してみしてほしい。
- (3) ASD だけでなくダウン症などの障害をもつ人々の相互行為の分析も是非やってみてほしい。

以上、本論文の総合評価は上記の通りで、主査、副査ともに全員一致で博士論文として十分な水準に達していると認めた。